



短歌は器として ちょうどいい

若手歌人として活躍中の大学院生

田口綾子^{さん}

短歌に心ひかれたきっかけは、俵万智さんの歌との出会いでした。「中3のとき国語の問題集で俵さんの作品を見ておもしろいなあと思って。文語でなくふだん自分が使っている言葉でも短歌が作れるんだと、びっくりしました」

誕生日に友だちからもらった俵さんの歌集数冊を「ほくほく読んでいた」のが中3の秋。徐々にほかの歌人の作品も読むようになりました。

自分で作りはじめたのは高1の冬。「五七五七七の形にすればとりあえず一首できる、そこがよかった」

「賞金の図書券目当てで」コンクールに応募するようになり、高3のとき全国高校生文芸コンクール短歌部門で優秀賞を受賞。大学入学後、真っ先に足を運んだのが、サークル「早稲田短歌会」でした。

「あの歌人のあの歌いいよね、なんて

いう話がいつさいできなかった高校時代とはまったく違って、先輩方から教えられることばかり」

週1回の歌会では、無記名で並べられた歌の中から各人がいいと思う2首に票を入れます。「人に読まれることを初めて意識するようになりました。

歌としてきれいなものをどうつくるか。その作業がおもしろくなってきた」

そして、大学3年から4年になるころにまとめた「冬の火」30首が若手歌人の登竜門「短歌研究新人賞」を受賞。

すきなひとがいつでも怖い どの角を曲がってもチキンライスのにおいみずいろのらせん階段を降りてくるあなたは冬を燃やす火になる

「実に巧緻で、こんな年の若い人だとはとても思えなかった」とは審査員で歌人の馬場あき子氏の評。受賞後、短歌誌への作品掲載や、ラジオ番組でリスナーからの応募作品を選評する仕事

を依頼されるなど、歌壇の一人として着実に歩みはじめました。

「私にとって短歌は自分のことをいうための器としてちょうどいい。まだまだひよっこなので、とにかく続けていくことが大事だと思っています」

*

09年3月に早稲田大学を退官した歌人で国文学者の佐佐木幸綱氏の最終講義の日。「俵万智さんも仙台から来られていて、初めてお会いしました。ガチガチになってご挨拶したら、「あれ？初めてだっけ」と(笑)。これまで本でしか知らなかった歌人の方々と実際にお会いして、「あの作品読んだよ」と声をかけていただけることが、今とてもうれしい」

当面の目標は？「両親を心配させないように就職して自立することです。できるだけ歌会には出たいから職場は都内で(笑)」

たくち・あやこ 1986年茨城県生まれ。早稲田大学大学院文学研究科修士2年。早稲田短歌会に所属。2008年、「冬の火」30首が「第51回短歌研究新人賞」を受賞。NHKラジオ第一放送「夜はぶちぶちケータイ短歌」(毎週日曜日、午後8時台)に出演中(次回の出演は2月27日の予定)。家族は両親と3歳下の妹(お父さんの美博さんは、2009年4月号の本誌「この子と歩む」に次女・友美子さんのことを執筆してくださいました)。



短歌研究新人賞授賞式にて(2008年9月)